

文章理解と語彙知識 —— F.B. Davis の研究をめぐって ——

塚 田 泰 彦*
(平成3年10月29日受理)

要 旨

国語科における読みの研究は、現在、読み手の既有知識が教材文の理解にどうかかわるかをめぐって、事例研究を中心に進められている。しかし理解にかかわる既有知識は多種多様で、その作用の実態をとらえることは容易なことではない。そこで、本稿では、この種の研究の現時点での課題は、これまでの読みの理解スキルの研究成果を振り返ることで主要スキルを特定し、このスキルとの関係を軸に既有知識の問題を定位することにあると考えた。

このため、読みの理解スキルの研究の中から、特に因子分析の手法による F.B. Davis の研究をレビューした。この研究が様々な理解スキルを相対的にとらえているからである。

その結果、読みの理解スキルについては、下位スキルを認める立場とそうでない立場とがあり、大勢は否定的であることがわかった。ただ、語彙知識についてだけは多くの研究者が理解スキルとしての独立性を認めていることが確認できたので、今後は、語彙知識を中心に読みにおける既有知識の問題を考えていくことの必要性が明確になった。

KEY WORDS

reading comprehension 文章理解
factor analysis 因子分析

vocabulary knowledge 語彙知識
skill スキル

1. は じ め に

本稿の目的は、国語科における読みの研究が現在かかえている次の2つの課題を統一ある視点からとらえることである。

- 1) 読者反応批評理論やスキーマ理論の影響を受けて、文章の理解にかかわる読み手の既有知識の役割が重視されてきているが、目下のところこの役割を明らかにする手順が曖昧である。そこで、理解にかかわる既有知識の種類を明確にした上で、今後特に研究対象とすべき主要な既有知識は何かを特定することが先決問題となる。
- 2) 一方、戦後米国の読書心理学の研究成果に学んで移入された読解（理解）スキルの研究史とこの問題をどう結びつけるかという課題がある。

本稿ではこの2つの課題を統一的にとらえるための鍵概念として「理解スキルとしての語彙

* 言語系教育講座

知識」を取り上げた。様々な理解スキルの中からなぜ語彙知識を取り上げるのか、その理由を明らかにすることが本稿の目的である。様々な理解スキルを扱ってきたこれまでの読解スキル論の枠組みの中での語彙知識の位置を明確にすることが、結果的に今日の既有知識論における語彙知識の重要性を意義づけることになると考えたからである¹⁾。

もとより文法知識や文章構造についての知識など多様な知識（スキル）が文章の理解に作用しているため、これらとの関係も踏まえながら語彙知識の役割や重要性に言及できることが望ましい。そこで、本稿では、他の知識（スキル）との関係で相対的に語彙知識の重要性をとらえた研究成果を振り返ることにした。

ただ、日本の読書心理学や国語教育学の研究領域では、この課題に正面から取り組んだまとまった論考に出会えなかったため、ここでは米国における読みの理解スキルの研究の中から F. B. Davis の研究を取り上げた。彼は、読みの理解スキルを因子分析という統計の手法を用いて研究した中心人物であり、彼の1944年の論考は読解スキルの研究史上画期的なものとして今日でもしばしば言及される。この研究で彼は、他のスキルとの関係を踏まえながら、特に理解にかかわる「語意味の知識」の重要性を統計的に明示したからである。本稿ではその後の彼の研究成果やそれに対する批判論文等を視野におさめることで、この問題の焦点がどこにあるのかを明らかにしようとした。（なお本稿では、語知識 word knowledge と語彙知識 vocabulary knowledge とを明確に区別しないで論を進めることにし、引用の場合の「語知識」以外は原則として「語彙知識」の用語を用いた。²⁾）

2. 読みにおける理解スキルの因子分析的研究

2.1 研究の出発とその意義

Davis は1942年の論文で過去20年の間に読みのつまずきの診断的研究が進歩したことを踏まえて、こう述べている。

「理想的には、読みの診断テストは、生徒が文章を理解するのに必要な最も重要な独立した知的能力や特定のスキルの信頼に足る測定を提供しなければならない。そうしたテストでなければもう役立たない。」³⁾

そこで、こうした方針の下に行われる研究では、読解力を構成する様々な要素（因子）としてこれまでに研究者達が独自に提出したリスト群を一定の方法で統合・整理し、真に基本的な読みの理解スキルは何なのかを実験的に特定しようとするのが目的になる。30年後（1972）の論文ではこう振り返っている。

「1930年代半ばまでに、読みの研究者の多くは、読解と呼ばれる心的過程の要素としてそれまでに示唆されてきた操作的なスキルの長いリストをその冗長性を除くことで縮小することができるかどうかを、主成分分析ないし因子分析で決めることが可能であると認識した。」⁴⁾

Hunt（1957）の次のことばもこの点に言及したものである。

「次のような問いを発したくなるのも自然である。読解と結びついた特定の因子を測定することは可能なのか。論理的な分析や思慮深い考察を通じて、読解過程に興味を持った多くの学生はいくつかのスキルや機能によって読解を記述しようとする方向へと進んだ。彼らの間には、読解は単一でないし統一的な機能としてよりもむしろ多くのスキルや能力によってより巧く記

述できるとする広い合意があるように思われる。』⁵⁾

読解過程の成立にかかわる基本スキルの特定というこのアプローチが画期的な展開を見せるのは、この研究に因子分析の手法が導入されたからであり、その中心的な役割を果たした研究者が Davis である。⁶⁾

Davis は、こうした研究の意義を次のように端的に表現している。

「筆者には、教師やテスト作成者に読解は非常に大きな読みの能力であると告げることは何の情報も提供することにはならないし、何の役にも立たないと思われる。しかし、少なくとも基本的に 5 つの関連のない知的能力が読解に含まれることを知らせたり、生徒の読みを改善するための学習訓練が構成できるよう 5 つのこれらの能力を特定することは、情報として意味があり有用であると思われる。』⁷⁾

2.2 研究の手順について

本稿では以下に Davis の 3 編の論文をレビューし、その研究成果をもとに、特に理解スキルとしての「語彙知識」の相対的な位置と特徴を明らかにすることが目的である。そのため、テスト作成、統計処理の逐一にわたって厳密に論及されているこれら 3 編の研究の手順自体を批判的に取り上げることはしなかった。そこで、レビューに入る前に、ここで予め彼の研究全般について若干のコメントを加えておきたい。

まず、この一連の研究が統計の技法としての因子分析法それ自体の開発の歴史と軌を一にしている点である。そのため、この手法を使った理解スキルの研究成果はこの分析手法の統計学上の適否の議論と重なっている面がある。本稿では、この統計学上の議論については全体的な確認にとどめ、直接その関連を検討することはできなかった。

また本稿では実際に活用された諸々のテスト自体をその調査項目に至るまで検討することもできなかった。研究の手順・方法自体について批判的な考察を加えることが本稿の目的ではないからである。ただテスト作成段階での手順の決定的な重要さはこうした研究の場合には見落せないで、一言、Davis の姿勢を如実に物語ることばをここに引用しておきたい。

「読解研究に因子分析の手法を使う研究で最も重要なステップは、テストの得点が因子化されているテストを選択することである。これらのテストが読解過程で試行されるべき最も重要な知的スキルの理論的に妥当な測定を提供しないならば、最も厳密な統計処理の適用も有意・有効な結果を生まない。この点の重要さはどれほど強調されてもされ過ぎることはない。』⁸⁾

筆者としてはこうした専門的な手法についてはできる限り識者の評価を参考にした。

3. F.B. Davisの研究成果

3.1 Davis (1944) の研究

この論文は、1941年の博士論文（未公開、筆者未見）の研究成果報告と目され、紹介検討されているデータはこれに依っている。（なお1942年の論文も同様である。）⁹⁾

文章理解に関与するスキルの種類と重要度を問題にするために、本研究は次のような手順を踏んでいる。

まず第一ステップとして、「読みの領域での権威が最も重要と考える理解スキルを特定するた

めに、先行論文の注意深いサーベイが行われた。その結果、数百の特定のスキルのリストが作られ、それらの多くはオーバーラップした。そこで、このリストは、同一のないし密接に関連した知的スキルの訓練を必要とすると思われるものを一つにグループ化するために筆者によって集中的に研究された。』¹⁰⁾

こうして9つのスキルのグループ分けがなされ、これが読解の基本スキルと見做された。9つのスキルは以下の通りである。

1. Knowledge of word meanings
2. Ability to select the appropriate meaning for a word or phrase in the light of its particular contextual setting
3. Ability to follow the organization of a passage and to identify antecedents and references in it
4. Ability to select the main thought of a passage
5. Ability to answer questions that are specifically answered in a passage
6. Ability to answer questions that are answered in a passage but not in the word in which the question is asked
7. Ability to draw inferences from a passage about its contents
8. Ability to recognize the literary devices used in a passage and to determine its tone and mood
9. Ability to determine a writer's purpose, intent, and point of view i.e., to draw inferences about a writer

次にこのスキルの測定のための客観テストの項目が決められ、9つの基本スキルの得点の内部相関を得るために、240の多肢選択項目がテストされた。421名について適切なデータが得られ、因子分析が行われた。

その結果「この9つの読みのスキルのテストを構成するために行われた主観的な判断は、テストのいくつかで、適度に『純粹な』因子測定となるような範囲で驚くほど反映された。』¹¹⁾ 分析結果を要約すると次のようになる。

- * 性差はなかったので考慮されなかった。
- * 9つのスキルの得点ごとの信頼性係数は予想通りかなり異なっていたが、全て有意であった。(スキル4:0.18~スキル1:0.90の範囲で)
- * 主観的な判断ではスキル1とスキル2~9それぞれとの相関が高いことが予想され、結果はその通りであった。スキル1が他の一つ一つの変数全てに共通の最大の要素であることは明白であるので、スキル1が一定のときのスキル2~9の内部相関を調べることは興味深いとして、その偏相関係数が計算された。結果は、0.05~0.53の範囲で、いずれもかなり低く、それぞれのスキルの独立性が予想された。すなわち読解は単一な能力ではないことが示唆された。
- * そこで、この問題を追求するために因子分析が行われ、その結果、成分については以下のような解釈が成された。¹²⁾
成分Ⅰは、明らかに「語知識」(スキル1)である。
成分Ⅱは、「読みにおける推論」の測定に対応しているものである。(スキル6, 7に最も高い因子負荷を持つ。)

[表 a]

Coefficients of Each of the Initial Variables That Yield Scores in the
Nine Independent Components
(Factor Loadings of Skills 1-9 in Components I-IX)

Components	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	
Variance	192.270	22.824	8.657	5.282	3.828	3.306	2.327	1.956	1.006	
Skills										Variance
1	.813	-.571	-.064	-.033	-.082	.006	-.016	.001	.011	134.699
2	.184	.124	-.005	-.003	.971	-.019	-.017	-.028	-.076	10.563
3	.057	.054	-.001	.000	-.000	.000	.997	.000	-.004	3.009
4	.027	.048	-.000	.000	.067	.000	.000	.000	.996	1.220
5	.107	.149	.152	-.003	-.022	.970	-.014	-.024	-.012	6.050
6	.341	.469	.567	-.531	-.129	-.204	-.044	-.001	-.023	32.169
7	.336	.580	-.719	.008	-.147	-.020	-.051	-.091	-.028	33.752
8	.078	.105	-.001	.141	-.000	.000	-.010	.981	-.007	3.456
9	.233	.253	.366	.835	-.080	-.126	-.027	-.166	-.013	16.540

成分IIIは、解釈が比較的難しいが、「筆者の明白な陳述を理解する力」に応ずるものであろう。

成分IVは、主に「筆者の意図・目的・視点を同定する能力」（スキル9）を測っている。

成分Vは、原理的には未知の語の意味を文脈から割り出す能力や語のいくつかの既知の意味のどれがその文脈では適切かを決める能力からなる（スキル2）。

成分VIは、多分に「文章の詳細な陳述をとらえる能力」のようである。

成分VIIは、原理的には、スキル3の測定と目される。

成分VIIIは、「文章の技巧についての知識」を測っている。

成分IXは、大いに、文章の要旨を選ぶ能力からなり、意味の総合における能力の測定と考えられる。

Davis は、以上のような手順を踏んで、スキルごとのテストの得点がそのまま主要な成分にかなり応じる結果になったことから、次のように評価している。

「9つの成分のうち、成分II, III, IV以外の全ては、実践的な目的にとっては、おそらく最初選ばれた9つの基本的な読みのスキルごとのなまの得点によって統計的に測定可能である。また成分VからIXまでは全分散のごく僅かの部分を占めるに過ぎないが、それらは有意差がある。（こうしたことから）読みの領域の権威の多くが重要と考えたスキルのいくらかは別々に教えられるべき独立の要素を含んでいると考えられる。」¹³⁾

この分析の主な結論は、「成分IとIIだけが実践的な目的に正当な根拠を与える十分な信頼性をもって測定できることが判明した」¹⁴⁾ことである。すなわち「語知識」と「推論の力」が安定した代表的な因子であると見做せるということである。（なお、この1944年の論文では言及されないが、この同じデータをめぐっての1968年の論文では、成分I～IXの安定性の高さが示され、成分得点の信頼性係数の有意性検定などが行われ、この分析結果をより堅実なものにしている。）¹⁵⁾

ここでは、Davis (1944) の研究の特徴ある結論として次の2点を確認しておく。

- 1) 理解の主要因子としての語知識（スキル1）の重要性および他のスキルからのその独立性（スキル1の共通性の高さ、2～9のスキルとの相関の低さによる）
- 2) 語知識と推論の力の2つのスキルで理解スキルのかかなりの分散を占めていること（スキル1：134.699，スキル6，7：32.169／33.752）

3.2 Davis (1968) の研究

この研究報告は、次にレビューする1972年の論文もそうであるが、Reading Research Quarterly 誌50頁におよぶ論考である。理解に含まれる知的スキルの特性についての最初の重要論文である1917年のE.L. Thorndikeの論文（3編）のレビューから始めて、この種の研究の20年代、30年代の史的考察を行った後、自らの1940年代の研究成果を振り返っている。後半では、その後の研究を踏まえて問題点を整理し、その解決のための実験研究を詳しく報告している。

本文では、まず1941年（1944年）の研究の問題点として次のような点をあげている。

- * 信頼性係数がかなり多様である。（スキル4：0.18～スキル1：0.90）
- * 異なるスキルを度々テストしつつも、数項目は同一の文章に基づいていた。そのため、9つのスキルの得点の内部相関とそれらの折半法による信頼性係数との両方とも、テストごとに変化する合計で見かけの高さを示した。

また、Thurstone (1946) は Davis (1944) を否定的に論じているが、それは「彼の分析がこのテストの偶然によらない固有の分散を含まなかった」¹⁶⁾からである。

そこで、これらの問題点を受けて、この1968年の研究では、「最も重要で測定可能な理解スキル各々の信頼できる分散の偶然によらない独自性分散」を推定した。「過去に活用された統計技法のどれも独自性分散の小さな量を追跡できるほどには洗練されていなかったので、本研究では、まず大きな標本数に基づく交差妥当化された独自性分析を行うことを計画した。」¹⁷⁾

研究の手順を要約すると次のようになる。

- * 1966年3月：試行テスト（高校3年生約400名），同11月：最終テスト（高校3年生約1100名）
- * この研究では1944年に9つであったスキルが微調整され8つになっている。（1944年のスキル4，6が本研究ではスキル3になっている。）
- * 8つのスキル各々に40項目計320のテスト項目が作成され、独自性分析に适当と判断されたスキルごとに各24項目が残された。これを等価な一組のテスト（形式C，D）に割当て、1100名の生徒がこの両形式ともテストされた。

この研究の結果および成果は一に独自性分析にかかわるものである。ここでは分析の詳細には触れず、ポイントのみ確認する。

分析の結果、独自性の推定値は表bの通りである。

この表bには、988名の全体標本での項目による交差妥当化の結果である‘within-day’と‘across-day’のマトリックスからの独自性の推定結果のまとめが、（スキル1～8）の誤差を除く分散における独自性分散のパーセントで示されている。

この推定結果によれば、「独自性分散の最大のパーセントは、スキル1で生じている。このデータは、このスキルの誤差でない分散の約32%はこの研究に使われた他の7つの理解スキルのどれにも含まれないことを示している。第2に大きなパーセントはスキル5である。この知的操作の誤差でない分散の約20%は他の7つのスキルのいずれにも含まれない。」¹⁸⁾

[表 b]

Summary of percentages of unique variance in the non-error variance of eight reading skills (N=988)

Skill	Cross validation by	
	Items and day (Within-day matrix)	Items (Across-day matrix)
1. Recalling word meanings	35	29
2. Drawing inferences about the meaning of a word from context	-1	8
3. Finding answers to questions answered explicitly or in paraphrase	13	7
4. Weaving together ideas in the content	5	5
5. Drawing inferences from the content	23	18
6. Recognizing a writer's purpose, attitude, tone, and mood	14	8
7. Identifying a writer's techniques	8	3
8. Following the structure of a passage	15	12

これは1944年の結果と比べると興味深い。単に「語知識」や「推論の力」が主要な理解スキルであることが示されただけでなく、このデータによれば、「理解に重要であると判断される8つのスキルに使われる知的能力の実質的な部分は互に独立しているということに疑いを残さない」¹⁹⁾と見られるからである。

なお次のことは、この研究の意義を端的に述べたものである。

「各スキルと連合した独自性分散がその因子パターンを大いに決定することはありそうに思われる。というのも、全分散が分析され、使われた9つのテストに共通する分散が、これまでは恐らく verbal reasoning ability として最もよく記述される一つの知的特性へと多分に帰せられる傾向にあったからである。」²⁰⁾

かくして、本研究はスキルの独自性（独立性）の代表的な主張となっている。

3.3 Davis (1972) の研究

本研究は新しい実験研究の成果を報告しているものではない。Davis (1944) と Davis (1968) への補説の論文と見ることができる。

前半のレビューの部分で、回帰分析的研究の先行研究の成果として Holmes および Singer の研究に多くの頁を割き、これらの研究の欠陥を補うものとして、自らの1968年の論文での独自性分析の重要性をアピールしている。

次に主成分分析ないし因子分析的研究をレビューし、これまでの自らの研究も反省下において、新たな問題点を指摘している。そのポイントは、主成分の解釈の問題で、これを解決するためにこの論文では、1968年のデータに新しい因子分析の手法を使い、2つのテスト形式（形式C, D）に一貫している4つの明白な因子（1968年の分析結果と多少の異同がある）をとらえている。

この1972年の分析の改善点について Davis はこう述べている。

「2つの注意深く等価にされた形式を高校3年生に適用した結果の因子分析からいくらか異なる結果が得られたという事実は、因子の解釈にはいかに注意深くあるべきかが示されている。この分析データは次のことを示唆する。すなわちいくつの主成分が解釈されるべきなのかないしは標準化されたバリマックス基準へと回転されるべきかどうかを決定するために Davis (1967, 1968) が活用した厳密な手続きは、0.05水準に代って、0.01水準で有意差のある信頼性係数をもつ得点を生む主成分のみを考慮すべきである、ということである。」²¹⁾

この新たな分析で抽出された4つの因子は1968年の分析で抽出された因子と多少のズレがあるので、同じくこの1968年のデータに再検討を加えた Spearritt (1972) の分析結果も合わせて、以下の表cに示した²²⁾。*印が抽出された因子を示す。なお Davis (1972) では2つの(*)が1つの因子として扱われている。

[表c]

	Davis(1968)	Davis(1972)	Spearritt(1972)
語意味の再生	*	*	*
文脈での意味の決定		*	*
明白でないしパラフレイズされた問いに答える	*	(*)	
観念をよりあわせる		(*)	
内容の推論	*	*	
筆者の意図・態度を理解する	*		*
文章の構造に即して読む	*		*

3.4 主要スキル間の関係について

表cに示したように、Davis (1968) は、1941 (1944) 年の研究を批判的に継承し、5つの読解因子を抽出した。また Davis (1972) では、さらにこれを4つの因子へと洗練している。一方、Spearritt (1972) は、この Davis (1968) のデータに最尤因子分析の手法上の改善を施して再検討を加え、4つのスキルを確認している。彼は、Davis (1968) でのスキル3 (内容の推論) の独自性が確認できないとしてこの1つだけを除外したのである。

以上のように、識別された因子にいくらかの異同はあるものの、彼らは、因子分析によって、いくつかの読解にかかわる独自のスキルを分離し特定することが可能であると考えている。

これに対して、こうした因子の抽出、特定スキルの独自性に否定的な論考も提示されてきた。初期のものでは Thurstone (1946) や Harris (1948) がある。この因子分析的研究の史的整理を試みた Berg (1973) や Rosenshine (1980) によれば、総じて結果は曖昧であるとして、否定的な立場でまとめられている。Davis のオリジナルなデータの批判的検討を行った Thorndike (1973-74) は、この否定的な立場を代表するものである。Davis の研究を「最も思慮深く計画され精確に集められたデータのセット」²³⁾であると評価しつつも、Davis の選んだ読みのスキルは識別可能ではないと彼は結論した。彼の分析によれば、第一因子が分散の93%を数え、別のセットでも80~90%を第一因子がカバーしたため、Davis が行った「語知識」と「読みにおける

推論」との区別ですら正当化されるものではないと結論づけている。彼の分析では「語知識」と「文章理解」との間にほとんど差がなかったからである。

以上の経緯を、Rosenshine は次のようにまとめている。

「これら3つの研究成果(筆者注: Davis, 1968, Davis, 1972, Spearritt, 1972)を見て、人は『異なる分析は異なる独自のスキルを生む』と考え、ただ一つのスキルすなわち語意味の知識だけが3つの分析に一貫していると考え。これら3つの分析にあっては、どんな独自のスキルが存在してもそれは特に強力なものではないのである。またさらに、この同一のデータをめぐる4つめの分析(Thorndike, 1973-74)によれば、どんな分離可能な読解スキルも確認されなかったのである。』²⁴⁾

ところで、このような否定的な立場を踏まえても、これまでの一連の分析結果から、語彙知識の独自性・重要性は大方の支持を得られるものであることが分かる。それは独自因子の存在を否定的に考える Thorndike (1973-74) がなお語彙知識が有意味な因子であることだけは否定していないことから首肯されるであろう。

こうした研究史を踏まえて、今日でも文章理解と語彙知識との強力な関係を論じる論者の多くはこの Davis の一連の研究結果を主要な根拠にしている訳である。本稿においても筆者としてはこの方向で語彙知識の活力を評価していくことが目的である。そこで、ひとまずこのことを確認した上で、他のスキルとの関係についてはこれ以上の言及を控えることにし、Davis の研究の結論として次の2点を再確認しておく。

- 1) 文章の理解においては、4つないし5つの主要な理解スキルが特定でき、かつそれぞれの独自性をみとめることができる。
- 2) 特に「語知識」は支配的なスキルで、これに次いで「(言語による)推論の力」が大いに重要である。

4. 理解スキルとしての語彙知識の独立性

4.1 理解スキルは単一な能力か

さて、先にも述べたように、本稿の主たる目的はいくつかの分離された主要スキル間の関係を踏まえて理解スキルとしての語彙知識について知見を得ることである。しかしこれまでも確認したように、相対的な重要性はともかくも、「関係」それ自体については多くを述べるに足る十分な情報がない状態である²⁵⁾。そこで、今後の議論の焦点は、支配的なスキルとして特定された「語知識」と「推論の力」との2つがどのような意味で区別できるのかまたできないかということになろう。

そこで、このあたりの事情に言及している Spearritt のことばをまず引用してみよう。

「この4つのスキル(筆者注:表c, 参照)は区別可能だけれどもそのいくらかはただ正にそうなのだということを強調しなければならない。語彙は Davis や Thorndike の分析でと同様最も区別できるものである。(中略)実際それは他の3つのスキルとともに1つの一般的な因子には包摂されえない。また因子分析の論理では、これら3つの因子それ自体が1つの一般的な因子に包摂され得るかどうかをテストすることはできない。しかし、(中略)語彙と他の因子との相関が考慮されないときは、残りの相関が極端に高いことは明白である。かくして、いく

らかの理解スキルは区別できたけれども、語知識テストからは区別されるように、ここに提示されたタイプの読解テストは、大きく言えば、一つの基本的な能力を測定しているのであり、それは『読みにおける推論』と称していいのかもしれない。そうすべきかどうか、また理解スキルがより注意深いテスト作成で推論スキルから区別され得るかどうかは、Carroll (1969, 1971)が示唆したように、さらなる研究が必要なのである。』²⁶⁾換言すればこの点での今後の課題は、語知識を除いたあとひとくりにされた読解の共通因子「推論」が、どのような意味で単一なスキルとしてしかとらえられないのかということを追究するということになる。

4.2 語彙知識の独立性について

では、本稿のテーマであり、ここに結果的に残った「語意味の知識 (語彙知識)」は、それ自体果たして真に一つのスキルとしての独立性を保つのであろうか。Davis のことばを借りれば「ア・プリオリに理解にとって基本的である」²⁷⁾のかどうか。それともテスト理解にかかわる一般的な言語理解の能力と重なってしまうものなのかどうか。

この点については、まずテスト作成の段階で当然 Davis は問題文の理解に関する被験者の能力についての配慮を行っている。そこで、このことを踏まえると、理解にかかわる語彙知識のスキルとしての位置づけは、おおよそ次の2つの立場になるであろう。

- 1) Davis の研究成果を全面的・積極的に受け入れ、4つないし5つの主要スキルを認める立場に立つ。その場合は、他のスキルとの関連を認めるよりもむしろそれぞれの独立性を認めた上で、語彙知識を特に支配的なスキルとして評価する。
- 2) もうひとつの立場は、「語知識」と「推論の力」という2つの主要スキルの重要性をバック・アップするものとして Davis の成果を評価する。

筆者は「読解における語彙知識の役割」をこの2)の立場で考えていこうとしている。

この立場は、スキルの識別可能性を否定的に考えるのではなく、むしろ読解の力を大きくこの2つのスキルに分けて考えていこうとするものである。それは、例えば、これまでも「字面読みの力」と「批判的思考力」との低い相関が示されてきたように、根拠のないことではない²⁸⁾。またどちらかと言えば、理解スキルの研究の当初 (Thorndike, 1917) から指摘されてきた立場でもある。先に引用した Spearritt のことばがよくこの立場を示唆していると筆者は判断しているが、折衷的で曖昧な立場というよりも、むしろ次のような明確な読解理論に結びつくものと考えられる。すなわち、「読解」は様々なレベルでの理解活動の統合の結果である。そのため、複数の主要スキルの活用の結果とだけ考えるよりも、スキル間の関係を考慮する方法としてスキルの所属するレベルをいくつか設定して考えることの方が望ましい。この方法も、またかなり一般的なものである。そこで、これらスキル間の関係を、読みの実態を踏まえながら読みのレベルの問題として考慮することがここでは改めて重要になる。その意味で、例えば、Carver (1973) の次の発案は傾聴に値すると思われる²⁹⁾。

Carver は、「字面読み」のレベルと「推論」のレベルとを区別することを提案している。彼はまず次の4つのレベルを区別して、レベル1, 2, 3が「字面読み」のレベル、レベル4が「推論」のレベルとおおよそ考えている。

レベル1には「語の脱コード化と文脈でのその意味の決定」、レベル2には「文章を理解するために語の意味を組織すること」が対応する。レベル3には「パラグラフの要点の把握」、レベル4には「内容の推論」が対応する。また言語単位 (語・文・パラグラフ) がレベル1・2・

3にそれぞれ対応する点も重要である。Carver はこれまでの読解テストがこの2種類のレベルを混同しており、そのためにその分析結果が曖昧なものになっていることを指摘し批判している。殊に「字面読み」のレベルを対象にしながらも、テストの問いの方は「推論」のレベルのものであるといった傾向があり、結果的には推論の力を測定しがちであった点を批判している。

この立場は理解を「明示的な意味の理解：字面読み」と「潜在的な意味の理解：解釈・批評」とに二分するものとも言えよう。

筆者としては、ここで Carver の示唆したレベルごとの内容を踏まえて、この枠組みを次のようにとらえ直すことを提案したい。

レベル a (字面読み) — 「語彙知識」

レベル b (推論読み) — 「推論」

もとよりレベル a には「統語知識」に当たるものも含まれるが、仮にこの知識の多くも「機能語」が司ると考えれば、これも「語彙知識」に含めて考えていくことが可能であるとする立場である。

以上、本稿は、語彙知識の支配的な独立性を確認することと、「語彙知識」と「推論」との関係を再調整したこの2つのレベル設定による枠組みを提案することが目的であった。この研究の枠組みの意味・根拠・有効性についての詳細な議論は別の機会に譲りたい。

ただ、別の拙稿³⁰⁾でいくらか論じたことであるが、筆者としては、この2つのレベルは語彙知識の定義の仕方や今日盛んに研究されているスキーマ理論を考慮することによって1つの関連性・連続性を与えられるものであると考えている。その意味で、この立場は、Davis のように読解をスキル観の立場でとらえようとする流れとは相対立してきた例えば K.S. Goodman のような全体観の立場を今後どう考えるかの出発点にもなるのではないかと考えている。³¹⁾

5. 結 語

基本的には、スキルの発想に立って、因子分析の手法を使った読解研究の必要性を認めて行こうとする立場で本稿は書かれている。戦後日本の読みの教育でスキルの考え方が実践的に果たした重要な役割を否定することはできない。しかし、これまでのような無批判な諸スキルの導入による読みの指導の混乱状況を見ると、改めて理解スキルに焦点を当てて、その決定・選定・系統化の経緯を科学的な研究成果にまで遡って確認する必要性を強く感じた。またそうすることが最近重視されてきている読みにおける既有知識の役割についての研究との接点を見出すことになると思ったからである。

〈付記〉

本稿の内容は日本読書学会第35回研究大会(1991.7.30-31.)において口頭発表したものである。

注

- 1) 既有知識の分類方法と語彙知識との関係については、拙稿（1990）で論じた。
- 2) Davis は「語意味の知識」(Knowledge of word meanings) を扱っているが、この知識と語彙知識との関連や読みにおける双方の役割を考えると、現段階では区別の実質的な意義が明確にはされていないと思われる。またその後の関連文献でも Davis のこの研究成果を「語彙知識」と読解との関係を明示したものとして扱うケースがしばしばである。（読みにおいてそれぞれが果たす役割の違いについては、この区別を明確にした上で、別の機会に論じるつもりである。）
- 3) Davis (1942). p.365.
- 4) Davis (1972). p.656.
- 5) Hunt (1957). p.161.
- 6) それ以前の1930年代にもスキル特定のための研究はいくらか行われており Feder (1938) は因子分析の手法を含む最初の研究とされているが、「Davis (1941) は、この領域の権威が最も重要と見做した読みの知的スキルを測定するテストを作成して、理解についての最初の因子分析的研究を行ったものである。」(Davis, 1968. p.504.)
- 7) Davis (1946). p.255.
- 8) Davis (1944). p.185.
- 9) Davis (1968). p.504., 参照.
- 10) Davis (1944). p.186.
- 11) Ibid., p.190.
- 12) Ibid., pp.191-2.
- 13) Ibid., pp.192-3.
- 14) Ibid., p.164.
- 15) Davis (1968). pp.505-6., 参照.
- 16) Davis (1972). p.657.
- 17) Davis (1968). p.510.
- 18) Ibid., pp.541-2.
- 19) Ibid., p.542.
- 20) Ibid., p.544.
- 21) Davis (1972). pp.669-70
- 22) この表示は、Rosenshine (1980). p.542. にあるものを直接参照した。
- 23) Thorndike (1973). p.138.
- 24) Rosenshine (1980). p.543.
- 25) Davis の主張は、読解の主要スキルの独自性を認めようとする点に特徴がある。しかし 4 つないし 5 つの特定のスキルの各々の独自性はかれの主張に反して未だ衆目の一致して受入れるところとはなっていない。一致をみない最大の理由は開拓されつつあった因子分析の統計技術自体の問題に内在する面が大きいうで、これまでの論争を要約して Andrich & Godfrey (1978-79) は次のように述べている。

「Davis の根気強く作られたテストの結果の解釈における多義性に対する一つの可能な理由説明は、伝統的な分析方法すなわち因子分析の不適切さである。データの統計的分析は常に詳

細な観察の単純化ないし要約のかたちを含んでいる。そこで、もしこの分析の方法と展望とがそのデータの一般化を支配する諸原理と一致しないなら、その時は、実験の次々の繰り返しの統計的要約は何なく曖昧な結果を生むことだろう。実験の次々の繰り返しから生まれる(ランダムな多様化に帰すべき)不可避の差異は比較的大きな役割を一つ一つの要約で演じるからである。」(pp.184-5.)

現在、この問題は Davis 自身は肯定的な発言はしていないが (Davis, 1972, p.172.), 一部でスキルの階層理論の模索へと展開している。ただし、因子分析はこうした階層を同定するのに有効な方法でないという発言もある (Rosenshine, 1980, p.547.)。

- 26) Spearritt (1972). pp.109-10.
- 27) Davis (1972). p.672.
- 28) Hunt (1957). p.162., 参照.
- 29) Carver (1973). pp.45-6.
- 30) 拙稿 (1989), (1990)., 参照.
- 31) Johnston (1983). pp.2-5., 参照.

引用・参考文献

- Audrich, D., Godfrey, J.R. (1978-79). Hierarches in the skills of Davis' Reading Comprehension Test, Form D: an empirical investigation using a latent trait model. *Reading Research Quarterly*, 14, 182-200.
- Berg, P.C. (1973). Evaluating reading abilities. In W.H. MacGinitie (Ed.) *Assessment problems in reading*. International Reading Association.
- Bourque, M.L. (1980). Specification and validation reading skills hierarchies. *Reading Research Quarterly*, 15, 237-267.
- Carver, R.P. (1973). Reading as reasoning: Implications for measurement. In W.H. MacGinitie (Ed.) *Assessment problems in reading*. International Reading Association. 44-56.
- Davis, F.B. (1941). Fundamental factors of comprehension in reading. Unpublished doctoral dissertation, Harvard University.
- Davis, F.B. (1942). Two new measures of reading ability. *Journal of Educational Psychology*, 33, 365-372.
- Davis, F.B. (1944). Fundamental factors of comprehension in reading. *Psychometrika*, 9, 185-197.
- Davis, F.B. (1945). The reliability of component scores. *Psychometrika*, 10, 57-60.
- Davis, F.B. (1946). A breif comment on Turstone's note on a reanalysis of Davis' reading test. *Psychometrika*, 11, 249-255.
- Davis, F.B. (1958). A note on part-whole correlation. *Journal of Educational Psychology*, 49, 77-79.
- Davis, F.B. (1968). Research in comprehension in reading. *Reading Research Quarterly*, 4, 499-545.
- Davis, F.B. (1972). Psychometric research on comprehension in reading. *Reading Research*

- Quarterly*, 12, 628-678.
- Devine, T.G. (1986). Teaching Reading Comprehension : From theory to practice. Allyn and Bacon, Inc.
- Harris, C.W. (1948). Measurement of comprehension in literature. *The School Review*, 56, 280-289 ; 332-342.
- Hurt, Jr.L.C. (1957). Can we measure specific factors associated with reading comprehension? *Journal of Educational Research*, 51, 161-172.
- Johnston, P.H. (1983). Reading Comprehension Assessment : A Cognitive Basis. International Reading Association.
- Rosenshine, B.V. (1980). Skill hierarchies in reading comprehension. In Spiro, R.J., Bruce, B.C., Brewer, W.F. (eds.) Theoretical Issues In Reading Comprehension. Lawrence Erlbaum Associates. 535-554.
- Spearritt, D. (1972). Identification of subskills of reading comprehension by maximum likelihood factor analysis. *Reading Research Quarterly*, 8, 92-111.
- Thorndike, E.L. (1917). Reading as reasoning : A study of mistakes in paragraph reading. *Journal of Educational Research*, 8, 323-332.
- Thorndike, R.L. (1973-74). Reading as reasoning. *Reading Research Quarterly*, 9, 137-147
- Thurstone, L.L. (1946). Note on a reanalysis of Davis' reading tests. *Psychometrika*, 11, 185-188.
- 塚田泰彦 (1989). 「読みの事前指導における意味マップの活用法について」, 国語科教育, 36, 1989, 75-82.
- 塚田泰彦 (1990). 「読みの事前指導における既有知識の位置づけについて」, 読書科学, 34, 3, 1990, 102-109.

Reading Comprehension and Vocabulary Knowledge

Yasuhiko TSUKADA*

ABSTRACT

Numerous attempts have been made by scholars to show how pre-existing knowledge of a reader has relevance to the understanding of reading materials in Japanese. They consists of many case studies. But it is so difficult to definite the content of a lot of interactions between pre-existing knowledges concerning the understanding because many different pre-existing knowledges exist. Thus, this paper is intended as an investigation of determining main skills concerning reading by reviewing the fruit of previous researches of the skills necessary for reading comprehension, and as a reconsideration of the theory of pre-existing knowledge in connenction with these skills.

For this purpose I reviewed, above all, F.D. Davis's study using factor analysis methods among many studies conducted about skills for reading comprehension. The main reason I deal with his study is that his study regards many skills concerning comprehension as a relative one.

* Division of Languages : Department of Japanese Languages